



TITLE:

ハンセンの人口政策に就いて

AUTHOR(S):

青盛, 和雄

CITATION:

青盛, 和雄. ハンセンの人口政策に就いて. 経済論叢 1940, 51(1): 109-120

ISSUE DATE:

1940-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/131400>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五卷第一號

昭和十五年七月

論叢

民族主義と帝國主義……………

文學博士 高田保馬

實踐學としての日本經濟學……………

經濟學博士 谷口吉彦

時論

日本國と蘭領東印度……………

法學博士 末廣重雄

研究

江戸時代の國產獎勵……………

經濟學士 堀江保藏

理想型理論の方法的意識……………

經濟學士 出口勇藏

自由貿易主義の吟味……………

經濟學士 岡倉伯士

說苑

北支滿洲損害保險市場……………

經濟學士 佐波宣平

ハンセンの人口政策に就いて……………

經濟學士 青盛和雄

附錄

彙報

外國雜誌論題

ハンセンの人口政策に就いて

青 盛 和 雄

一 は し が き

凡そ人口政策とは何かを茲に仰々しく述べ立てる積りはなく、唯斯く題する所以は自ら了解され得る如く、ハンセンの著作を解題する目的上の便宜に従つたに過ぎない。故に本文はハンセンの人口論を語つた前稿と密接不可分離なる關係を有するものではあるが、斯説の批判が多くは此の人口理論が成立するか否かに拘泥して、遂に論者の人口政策的見解を検討する餘裕がなかつたのに對し、既に若干の反批判を試みて來たから、今度は此等の祖述者の側に立つてハンセン説紹介の筆を其の著書の後半の諸章に移しても差支ないであらう。

我が「人口三序論」の著者は獨特なる人口理論を歐洲諸國の歴史に適用して解説したる後に、主として彼の

1) 拙稿、Lハンセンの人口論に就いて、經濟論叢 昭和十五年二月號參照。

祖國民たる獨逸民族の實踐躬行すべき道を「國家の使命」Die Aufgabe des Staates と題して物語つて居り、決して抽象的にして一般的なる世界の人口問題への對策を論じては居ない。若し人口政策なるものが各國共通の所謂人口問題への效果乏しき對策を練るに過ぎないものならば、斯る論題の選擇は適切でないかも知れないが、併し一定の人口理論を前提とし猶且つ採らざるを得ない民族の使命を痛感せしむる態のものがあれば、其こそ眞の人口政策と呼ぶに値するものであらうと思はれる。

次に述ぶるクレマー、ロツシュの如きは悉く評論の核心を斯る人口政策的部分に轉じて居る人達ではあるが、前述の批判に鑑みる吾人としては、専らハンセンの著作禮讀にのみ終始せざる様に、適宜に反對者の所論を參照しつつ、彼の人口政策論への正當なる評價を基礎付けて行きたい。或は祖述者は「述べて作らず」が理想であると云はれるかも知れないが、併し猶多少の私見に依る取捨が行はれる限り、純粹に客觀的な

解題は恐らくあり得ないのではなからうかと危惧し乍らも、敢て之を諸賢の御判讀に委ねたいと思ふ。

二 クレーマーの戰時序文と

農政學的評論

扱ハンセンは其の著作を世に問ふてより二十有餘年間を南獨逸に暮したであらうと想像されるのであるが、斯る事實すら不明瞭な程にハンセンと其の著作とは世俗から全く顧みられざるに至つて居たのは既述の通りである。

斯くて「人口三序論」第一版刊行後四半世紀にして勃發せる世界大戰の眞最中なる一九一五年初春の戰雲色濃き民顯市に於て、原著者死後の複刻版を發行せるクレマー教授の可成り長文に互る序は、再び巡り來れる歐洲大戰の第二年目の春に於て吟味の必要と興味を兼備すると考へて、次に大要を引用して見よう。

獨逸經濟學及び農政學の碩學がハンセンの著作に注目し批評し若しくは愛讀してから既に年久しく經過し

- 1) 拙稿、十九世紀末葉の人口論者ハンセンに就いて、經濟論叢、昨年十月號。
- 2) G. Hansen; Die drei Bevölkerungsstufen. Neue Ausgabe mit einer Einleitung von Dr. H. Kraemer. München 1915. SS. III-XII.
- 3) Kraemer は名指しせざれども A. Wagner 及び A. Buchenberger に對して斯く云ふのであらう。

て了つたが、今日世評は果して如何と疑問を投じたクレーマー博士は自ら解答して曰ふ。苟くも一度でもこの著作を読めば、誰でも必ず農業の價值と重要性を斯く迄に明確完全に洞察せる著者の炯眼に敬服するに相違ないのであるが、残念乍らこの形式内容相共に卓越せる原著もハンセンの期待通りに同じ祖國の人々に注目されることが餘りに少かつた。其にも抱らず著者の思想的魅力に感嘆措く能はざらしめる所以は、世界に於ける獨逸文化並びに獨逸國力に關聯して頗る重要な問題への示唆が此書に於て論及されてゐることに見出されるであらうし、このことは特に今日に於て一層その感を深うすると。

次いで世界を震撼せる大戰の只中に生活せる有識有能なる獨逸國民の最も痛切なる要求として食糧資源の確保を絶叫して居る彼クレーマーは、平常時に於て農業事情に全く無關心なる人々や商工業の農業に對し跋行的なる發展のみに將來の獨逸の都市的繁榮を夢想せる人々に對して、國民生活全體に於て健全なる農民層

の有する聖なる價值を感銘せしめんとして次の警告を發して居る。『若しも獨逸が祖國の農業を損傷し去るならば、敵國の砲火の洗禮に俟つ迄もなく忽ち滅亡して了ふ』といふモルトケ將軍の言葉に燦然たる輝きがあるであらうと斷言して居る。

斯くて第一次世界大戰に對處すべき獨逸國民の鐵血に滾る信念を語るに、『若しも世界が毀たれて倒るとせば、崩壞は驚かざる彼を打つならん』との古き羅旬語の章句を以てし、之を註釋して『假令此の世は破滅するとも正しき人は驚かず』と云ひ、恰も今事變に於ける我國民の愛唱せる古歌『海ゆかば』を想起せしむるものがある。されば斯る恐瀾怒濤の如き動亂の獨逸にも何處かに奥深く潜む平靜なるものが存在して居るのは、國民經濟全體が絶えず健全なる新陳代謝を續けて居る證據であるとし、クレーマーは之を獨逸國民の田園的神經と呼んでゐる。而して戦争が既に長期化した以上、農業生産物の自給可能性の有無が最も肝腎な問題であるとし、平素は農民層の供給する食糧の生産數

4) Moltkes Wort ist zu Ehren gekommen, dass Deutschland ohne einen Schluss abzufeuern verloren sein müsste, wenn es seine Landwirtschaft einbüsst.
5) Si fractus illabatur orbis, impavidum ferient ruinae.
6) ländlichen Nerven unseres Volkes.

量や通商貿易に基づく物資の需統統計は無味乾燥であるとして述べてゐたのに反して、戦時に在つては物的資源の有無が全く國民の生死を左右する魔力を帯びると共に、外見的には物質的にのみ思考され易い農業經濟問題が今日に於ては最高の精神的價值を發揮して來ると論じて居る。

現時の戰備工作過程に於ては商工業階級層の貢獻する所大なる方面も認められるから、今日は最早や昔作らの農業立國を主張したり、或は文明人を山猿に復歸せしむる政策は到底強行し得ない。其故に現下幾多の難關と障害があり、又勞働者問題も存するにも拘らず、吾々は先づ農民を社會的に深く理解することに依つて内から外への改良を企圖すべきであり、斯る意味に於て吾々はハンセンの輝しくも展開せる人口三段階中の現象と關聯を持つに至るであらう。

以上の前提からハンセン説を紹介せるクレマーは更に一般的には商工業者の世界政策的傾向を指摘し、農業者の郷土政策を愛好する所以を語り、大都會に於

て鄉村からの移住の人口更新の功德を悉述して居る。此際に於て農業に對する國民的理解の缺除を慨嘆するの餘り、農民に對する情愛溢れたハンセンの敘述にのみ讃辭を捧げるのは、恐らく農政學者としてのクレマーの我田引水とも評し得ようけれども、吾々は猶暫らく彼の序文に従つて述べて行く必要があらう。時恰も熾烈なる鬭争時代に遭逢せる獨逸人に採つては、都市産業たる商工業の發展は元來農業經濟の發達に伴ふべきであり、都會と農村の産業が相調和することが望ましいのである。之を人口周流の問題で説明すれば、自らの人口を蕩盡しつゝある都市が子供も少く繁殖力も缺乏せるに對して、斯様な人口減少なるものを全く知らないかの如き田舎から人間の移住的供給を受けるといふ作用に依つて、都會人は云はゞ血液の更新を計ることが肝要となる。

斯くして一國人口の都市集中化が行はれ、農村人口の全國民に於て占むる割合が減少すれば、個別産業部門相互間の摩擦が増加し、其爲にも『鬭争はすべての

7) 昭和十四年八月我國に所謂「物の國勢調査」施行と昨秋以來の物資需給不圖滑の状態を想起されたし。
8) eine Besserung von innen heraus.

その父⁹⁾ *roditelnyy narodnyy dvorov* なる言葉を經濟戰線にも徴用して、各個の職業間に存する利害を協和し衝突を除去して、現段階に於ける獨逸國家の爲には食糧資源の涵養と農民層の維持強化を計る必要が叫ばれる事となる。併し斯る政策が如何にして實施され得るかをクレーマーは語つて居ない。唯未だ人間が有餘つて春に對策を實行せざれば、既に遲過ぎる秋も遠からずとし、この手遅れの場合の恐るべきことはハンセンの著作を読めば判明すると紹介の辭を結んでゐるに過ぎない。

吾々はこの新版序文に對する批評を再版紹介者ロッシェに據りて次の如く述べ得よう。¹⁰⁾ ストッツガルト郊外ホーヘンハイムなるクレーマー博士の文章は頗る痛快な熱情を覺えさせられるが、彼はハンセンの著作の農業に對する重要性を餘りに一方的に誇張し過ぎてゐる。ハンセンの著述は農民と市民と勞働者に對して卒直にして公平なる水準線を維持して居り、換言すれば夫々の人口階層の國民經濟的重要性を意義付けると共

ハンセンの人口政策に就いて

に其の限界を劃するものである。従つて政略的にして興味本意なる警句で充滿せるジャーナリズム的壯辭は此書物と何等の關係もないと謂はねばならぬ。

このロッシェの批判は可成り辛辣ではあるが、クレーマーの所謂る農政學的ハンセン評價に就いては幾分ならず肯綮に當るものがあり、同様な批評がハンセンの著作第、版發行の當時僅かに之に觸れてゐるブーヘンベルガーに對しても妥當するのではあるまいか、即ちハンセンの著作に農民の社會經濟的意義に關する美しき論證を見出すと云へる農政學者ブーヘンベルガーも其の著の第二版以後に於ては全くハンセンを顧みる所がない事實より推斷すれば、吾々は斯る農政學的立場でのみハンセンを解釋せんとする人々と袂を分つて、最初の紹介者たるロッシェの經濟學的評價の研究に立歸るべきであらう。

三 ロッシェの經濟學的評價

生粹のウエルテンベルグ人なるロッシェが二十七歳

第五十一卷 一一三 第一號 一一三

9) Der Kampf ist Vater aller Dinge (Herakleitos).
10) Allg. St. Archiv. Jg. 9. 1915, S. 746 Einleitung von Dr. H. Krämer, P. of. an der Landwirtschaftl. Hochschule Hohenheim, Stuttgart. (H. J. Losch)
11) A. Buchenberger; Agrarwesen und Agrarpolitik. Bd. I. Lpz. 1892. S. 611 (Nachträge und Berichtungen.)

の秋に¹⁾、シュレスウイヒ生れの我がハンセンの著作を最初に批評したのは、今から恰度五十年前に當る一八九〇年であつた。²⁾之が爾來四半世紀の間に於て前稿に述べたアモン・クチンスキーにハンセンを知らしむる端緒となり、一九一五年にクレマーの複刻出するや再び之を紹介し、獨り超然としてハンセン説への深き理解を示してゐるのは、ハンセン解題への一指針として逸すべからざる見識を具有せるかに思へるので、茲に其の趣旨を摘録して置きたいと思ふ。

彼は其の前後に發表せる著作の論題からも知られる如く、³⁾特に國民經濟學的觀點を重要視して次の如く述べる。或時代に於ける或國民の經濟的特質は生産されたる商品と人間なる二つの大量現象が内部的に如何に組織し構成されてゐるかの状態に依つて示される。既往の理論經濟學の最大なる缺陷はこの經濟現象組成上の二大礎石たる總體の商品大量と全體の國民大量とを以て、同時存在の事實と見做さず、従つて又商品と人口との國民經濟的聯關を問題とせざる點に認められる。

斯る前提に立つてロッシューは先づ商品生産過程の分析にのみ没頭せるマルクスの見解に觸れ、之等社會主義學派の人々の等閑視せる問題として人間生産過程を精密に觀察する必要を強調し、以てハンセン説登場の必須なる所以を冒頭に説いて居る。

一般に商品流通は人間交通に比較すると自由であり、逆に人口移動は財貨交換よりも困難であるから、人口大量は單に資本でふ妖怪の力を利用するか否かに依つて所謂資本家と勞働者とを抽出するのみでは不十分であり、猶全體の人口構成を通觀して都鄙人口周流といふ獨特なる姿を發見する必要がある。ハンセンは斯る國民大量を構成せる各人口階層間の獨自なる流轉相を實に克明に穿鑿し盡してゐる。

以上の解説に次いでロッシューのハンセン引用は悉細に人口三序論の各章に及んでゐるが、ハンセンの人口政策を論ずる本稿に於ては、問題をロッシューの述べてゐるハンセンの政策的部分に限定する必要がある。

國家の使命としてハンセンが既往の人口對策と同様

- 1) H. J. Losch (1863, Murhardt in Württemberg)
- 2) Jahrbuch f. Gesetzgeb. Verw. u. Volkswirtschaft im Deutschen Reich. Jg. 19. Leipzig 1890, SS. 998-1001. (Literatur.)
- 3) H. Losch: Volksvermögen, Volkseinkommen und ihre Verteilung, 1889. Nationale Produktion und nationale Berufsgliederung, 1892.

に説くのは、國家全體の人口を發展増加せしむる爲に迅速にして均勢なる人口周流を促すことにあつた。先づ農民層に對しては都會へ牛酪や乾酪のみならず人間をも供給することが肝要であるとし、國民總體の爲には最適なる人間餘剰を能ふ限り多數に出産せしめ得るが如き經濟社會制度が希望される。即ちこの目的の爲に都市及び田舎に於ける土地財産相續法の區別や穀物關稅に依る農民救済策も提唱せられ、又農民の都會移住への道を平坦化し、人口移動の自由を賦與する必要が述べられてゐる。然らば斯くして集中されたる都市人口に對するハンセンの政策は如何といふに、其は「中流層と資本主義」及び「勞働層の保護」といふ二章に述べられて居るのではあるが、今は唯ロッシユと共に、ハンセンの語れる政策の中で最も時宜的なりと考へられる植民政策の一端を述べるに先立つて、上述の都市來住獎勵策からして、都市問題に對する考慮をハンセンに求められないのではないかと危懼する人の爲に、ロッシユの説いて居る所を引用して置くに過ぎない事

ハンセンの人口政策に就いて

とする。「國家の採り得る唯一の事は高額の勞賃を支拂ひ得る産業を放任して置くべきでもなく、又斯る理由から勞働者が結婚を喜ばざるに至る迄に婦女幼少年の勞働を自由に放任することを制限すべきである。」

ハンセンは決して移民の友ではなく、海外移住を以て現代國家の通弊とすら考へた。精神的に熟慮せる國民に執つては移植民は何等必要でなく、没落し行く國民に於ては重荷でさへある。吾々には海外移住は中流層に依る農民層壓迫の結果に過ぎないと思はれる。之に反して國內移植民は非常に重要であるとし、國境を接してゐる國外移植民をも含めて次の如く語つてゐるのは、現時局下に於けるヒットラーの東方政策⁵⁾と思ひ較べて頗る興味深いものがある。即ちハンセン曰く、「吾々の東西の國境線に於て新たに獲得せられたる村々は、將來に於て印度を二つ領有するよりも一層力強いものがある」と。此際ハンセンの移住政策には明かに國境が認められることを擧げて置かねばならぬ。

扱ロッシユはハンセンの著作内容の紹介に附言し

4) Losch, Allg. St. Archiv. 1915, S. 746.
5) A. Hitler; Mein Kampf. Bd. 2. München 1927. SS. 301-331. (Kap. 14. Ost-orientierung od. Ostpolitik).
6) G. Hansen; Die drei Bevölkerungsstufen, München 1889, S. 392.

て、本書こそ獨逸經濟學の顯著なる進歩を物語るものであり獨逸學界の誇りでもあると賞讃の辭を捧げてゐる。其の理由はハンセンが國家全體の人的資源に獨自なる內的關聯を與へて之を展開して居り、獨創的革新的なる人口政策と之を指導すべき天才的なる人口理論とを兼備せりと確認し得たからであらう。

以上の讃辭に附加ふるにロッシニはハンセンの貢獻を人口周流の指摘にあつたと限定し、他面に於て經濟的技術の問題がハンセンの説き及ばなかつた點であるとし、國民的生産機構の敘述といふ至難ではあるが貴重なる使命の達成が望蜀感として語られてゐる。ハンセンと共にロッシニが獨逸國民に期待せる所は次の如くである。「現に始まつてゐる大規模にして比類なき生産集中過程に於て、より多くの精神努力を吾々國民の爲に活用し、斯くて招來さるべき技術の進歩や科學の發展に依つて、吾々獨逸國民は精神的なると共に經濟的なる考慮で身を守ることが出来る。斯る曉に於ては假令日本人や支那人等々の民族が知らぬ間に現代獨

逸の技術的生産段階に到達してゐようとも將來の獨逸人は更により高き生産技術段階の音色を全世界に轟かせ得るであらう」。

斯の如く最初の紹介文を結んでから二十五ヶ年の後に、新複刻版に際して再び筆を執つて其の間の推移を敘しつゝ語る。「余はこの獨特にして暗示的であり且つ封鎖的なる著作とは云へ、再版刊行までに四半世紀を必要とするとは思はなかつたが、併し現在でも猶當時の所謂『理論經濟學』的な評價を高く買ふ。人口の三段階の存在と發生は國民社會の構成分子であり國家要素であるとハンセンの語つたことは、其の言の如く財貨の流通並びに人間の再生産に依る循環過程に對する封鎖的見解の表現である。唯普通と多少異なる特徴とも稱し得べきは、殆んど例外なく人口を語らうとしないか或は何處かで僅かに觸れるに過ぎなかつた所の經濟學の教科書と好き對照をなす點である。」

最後にロッシニが批判しつゝも暗黙裡に影響を蒙つてゐるワグナーのハンセン批評を附記して置かう。

7) A. Wagner; Handbuch d. politische Ökonomie, Teil I. Grundlage der Volkswirtschaft. Buch 4. Bevölkerung und Volkswirtschaft. Leipzig 1893, S. 466.

「この獨特にして精神的であり、大體に於て妥當ではあるが多少の難點をも免れ難いハンセンの人口三序論に言及しよう。其の議論の主要はある程度の蓋然性を有するにしても、使用されたる（尤も既存の）統計や歴史的资料に關して著者の論證は完全ではない。ハンセン説は國民が生理的にも精神的にも開花期を永く維持し、農村人口の没落が國家全體に恢復し難き結果を齎らすことを防止する爲に、如何に絶え間なき都鄙人口周流が生起し又發生せねばならなかつたかを示してゐる。この著述の眞摯なる動機は人口に對する世界經濟的産業主義の影響 *Wirkungen des weltwirtschaftliche Industrialismus* といふ點に關聯してゐる」

再人は今暫らくこの經濟學界の耆宿の言ふ所を玩味して見るべきであらう。

四 ハンセンの人口周流

對策に就いて

以上のハンセン解題に缺如せるは、人口三段階に對

ハンセンの人口政策に就いて

して就中都市中流層に對して如何なる政策基準を有するかといふことと、全編の結語「人口周流と文學」なる章に現はれたる彼の文化政策とに關してであらう。農民層の維持勞働層の保護を論じたるハンセンは中流層に對しては唯この階層と資本主義との關係を論じてゐるに過ぎない。又「人口三階梯間の鬭争」と題して主として歐洲諸國に於て彼の人口周流理論の歴史的檢證を行へる前編中の冒頭の一章を、「中流層の持久策への努力」とせる事實は著者の社會的立場を示して遺憾なきものである。自己の屬する階級を結局に於て滅亡し行くものと認め乍ら、絶えず農村人口からの更替に依つて都市文化即ち一國の文化は維持されるとの確信は決して單なる悲觀的人口論と見做すべきではない。

茲では既往の解題者から見落されて來た結語の一章に就いて最後に附説する必要があるであらう。ロッシュは之に對して先づ斯く評してゐる。「附録的に追加されたる結語は文學の開花期は人口段階の發展と直接の因果關係ありとする興味ある研究ではあるが、苟くも本當

- 1) Hansen, S. 236. Das Streben des Mittelstandes, sich dauernd zu machen.
- 2) Losch は上掲雜誌論文100頁に於て der eifrige Beobachter der Volksstände Riehl としてゐるに過ぎぬが、恐らくは Die Naturgeschichte des Volkes als Grundlage einer deutschen Sozial-Politik (4 Bde. 1853-69). の著者なる文明史家 W. H. v. Riehl (1823-97) を指すのではなからうか。

に文化史的背景を有する文學史を描かんと欲せば、この章は餘り推賞出来ない。「併るに其に續く箇所に於て「ハンセンは熱心なる國民狀態觀察者リール²⁾が豫言し追求せる所を實踐せる者である」と、こゝでは却つてハンセンを賞讃せる模様であるが、吾人は未だこの兩者の關聯を追跡し得る迄には至らないけれども、若しロッシュが再版紹介の際に述べたる如く、「文學とは作詩藝術の意味であり、従つて文學と人口周流は關係あり」とされるのであれば、何故に彼は之を次の如く反駁せねばならなかつたかの理由を了解し難い。「今迄獨逸の文學史家がこの章に就いて何處かで解説せる實例を知らない。然も猶この章はゲーテの模倣が廣く流行せる時代であり又文學史上の歴史主義時代である頃に於ては重要でもあり必須でもあつたのであらう」。

吾人は殊更立入つて獨逸文學史上に於けるハンセン説の地位を月旦する積りは毛頭ないが、彼が人口理論及び人口政策に關する著書を結ぶにこの章を以てしたことは、實は理由あることで決して附録的にして冗長

なる餘論ではない。この點に關するヘルクナーの見識を次に窺ふ事としよう。³⁾「農村人口は多くの人々の見解に依れば全國民の固有なる青春の血の源泉であり、子孫を減少せしむるが如き都會は人類の墓場である。都會人口が農村の犠牲に於て増大すればする程、益々文明の花は急速に咲き揃ふものではあるが、併し其は云はゞ肺癆に病む佳人の頬に浮ぶ薔薇の色香にも似てゐる。聽て農村人口が喰盡されると都市中流層の精神水準は忽ち低下し、其爲に全體の衰微を生ずるに違ひない」。以上のハンセン著書中⁴⁾からの引用に脚註してヘルクナーはゲーテを併りて、「農民は沈滞し行く人類に絶えず力を補給し之を新鮮ならしむる」と物語つてゐる。同様な見解はロツシヤ、マール、ラスキンにも見られる所である。

以上で吾々は既述のクレマー批判に際し排除せる農本政策的要素を悉し返した嫌がないでもないが、意味する所は寧ろ一國文化水準維持の爲に都鄙人口周流の緩急宜敷きを得て絶え間なく人口の更替することに

* Zeitalter des Goethe-Alexandrinertums und des literaturgeschichtlichen Historismus. ゲーテ (Goethe 1749—1832) 以後の時代に於て彼の模倣が一般に流行し、例へばアレクサンドリーネ風の詩が愛好された頃、及び十九世紀中葉の所謂ロマンティズム時代を指すのであらうか。

3) H. Herkner; Die Arbeiterfrage. Aufl. 4. Berlin 1905, S. 55.

あるのである。蓋しハンセンの見る所では、都市中流層の最高なる精神水準は田舎からの新しい力の流入に影響されるのだから、一時的には農民層の破壊に基づく人口過剰でも猶克く都市文化を繁榮せしむることも出来るが、都市人口は其自身の力に依つて維持せられ難いが故に、永續する文明の開花期を夢見んが爲には自力に依る復活を望み得る健全なる農民層の存在を必要とする。換言すれば健全なる農民層と中流層の高き精神水準とは相互に因果關係を有するのである。従つて斯る状態は特に戦争の如き異常なる事件に依つてのみ招來される。戦争の影響は常に人口周流の促進であるから、中流層への影響は總ては農民層に代替され、都市への農民流入は中流層の精神水準を益々上昇せしめて文學時代發生の條件を具備すると共に、次には國家全體の人口を減少せしめて益々都市人口割合を高める事となる。斯くては農村の人口源泉も遂には涸渇するであらうから、ハンセンは其の著作を次の言葉で結ばねばならなかつた。

ハンセンの人口政策に就いて

「歴史は教へてゐる、健全なる農民を保持せる國民は恐らく打勝ち得るであらうし、或は打倒されるかも知れぬが併しアンタイオス Antaios の如く再び新鮮なる力を得て大城から立上る。そして恰もヘルクレス Hercules が土から起き上つたばかりのアンタイオスをた易くその腕の中に束縛し得ると同様に、若し萬物を育成する母なる大地と人間とを結付けてゐる紐帶を農民層の破壊に依つて斷切るならば、國民は遂に滅亡の運命を賦せられるであらうと」

五　　す　　び

以上ハンセンの人口政策として著作解題を試みたる所は餘りに移住の自由を強調し過ぎたる如く解せられるであらうが、これこそ彼の人口理論に裏付けられた人口政策の必然的結果とも見做され得よう。何故ならば都市人口は自力のみでは維持されず、農村人口が之を補給する必要があるからである。殊に戦争なるものが人口周流を促進し、従つて人口の都市集中と共に都

4) Hansen; a. a. O. S. 323.

5) Goethe; Ausserungen zu Eckermann, 12. März 1828. Roscher; Ansichten der Volkswirtschaft 1. Aufl. 3, 1878, S. 279. Marshall; Principle of economics, London 1891, p. 257. Ruskin; Wege zur Kunst I. Strassburg. S. XVII ff.

6) Hansen; a. a. O. SS. 404—405.

7) Hansen; a. a. O. S. 407.

市文化の繁榮と頽廢を招來するとの見解は實にハンセン説の一大特徴と稱すべきであらう。誰か都市近郊の似而非田園生活の存在や工業の地方分散若しくは農村工業化等々の懸聲で以て、之を「農村へ歸れ」¹⁾、「*Rückkehr nach dem Lande*」の合言葉と見做すことが出来よう。國內移住運動は全國を打つて一丸とする大勞働市場を構成し、以て國民經濟の運営をなさしむるの作用がある。ハンセンの所謂國境を越えて近接大陸への移植民的交流は益々戰時下の我國に於ても盛んにならうとしてゐる際に之と關聯し唯將來に於て如何なる問題が発生するであらうかを指摘して置くに止めよう。

「凡て戰なるものは多くの人を殺す」²⁾といふ嚴肅なる事實に直面して、吾々はこの國家須要なる人的資源が一體何處で育成されつゝあるかを顧みるべきであらう。彼の從軍僧侶ジュースミルヒが喝破して以來、一婚姻當り自然的なる人類繁殖力と壽命の期間には東西古今を通じて格別の差異はないにしても、都鄙社會階級別の現實の出産率の差異は相當顯著に認められる。

されば結局に於て既存の人口で國民總體の活動力が維持せられ得る爲には、適材を適所に配置する如く移住の自由が認められて然るべきだと考へる。而して現在既に存在する人口も總ては死滅すべき宿命であると悟れば、自著の卷頭に於て「生めよ殖えよ地に滿てよ之を服從せよ」³⁾「*Seyd fruchtbar und mehrtet euch, und erfüllet die Erde, und macht sie euch unterthan, und herrsche!*」といひ、結言として「我が祖國の爲に最後に願望したいのは、農業を出来る限り完全に遂行せしめられんこと並びに工業が中庸を得て堅實であり而も賢慮によつて整備せられんことであり、殊に豊耕に依據せる人口が一層よく増殖せしめ得られることから國家の安全と國力並びに國民の富の充實が期待し得られ、且祖國の商業的繁榮とよき秩序ある自由が、徳性と正義を相伴はんことを祈るにある」⁴⁾といったジュースミルヒの言葉が、猶現時局下の人口政策或は戰時經濟政策の基準となり、惹いてはハンセンの著作解題に對する結びともなるであらう。(二六〇〇年四月稿了)

1) W. Morgenroth; Binnenwanderung. Handwörterbuch der Staatswissenschaften. Aufl. IV, Bd. II, Jena 1924, S. 921.

2) 杉浦重剛謹撰倫理御進講草案

3) J.P. Süßmilch; Die göttliche Ordnung. Ausg. IV. 1775. Teil I. S. 4.

4) Süßmilch; Die göttl. Ordnung. Teil II. Ausg. II. 1762, SS. 533-534.